

一石橋の親柱（いちこくばし の おやばしら）

大正11年6月に木橋からRCアーチ橋（鉄筋コンクリート）に改架され、橋長43m余、幅27m余で花崗岩の石張りの立派な橋となりました。親柱は4本、袖柱は8本の構造で、橋幅は広く、中央を市電が通っていました。翌12年9月の関東大震災でも落橋せず使用されていましたが、昭和39年の首都高速道路の建設で改修され、親柱2本を撤去、同[*中央区HPで教育委員会の文化財解説には「同年」とあるが「同」の間違いであろう]48年に鋼鉄橋梁となり、袖柱4本も撤去。RCアーチ橋創建当時の親柱は2本残っていましたが、平成9年に大改修をした際に1本を残して撤去されました。



一石橋の親柱 写真左手は迷子しらせ石標

残った1本は大正11年改架当時の重量感ある大型の親柱で、関東大震災以前のRCアーチ橋のものとしては、都内最古の親柱として貴重な近代文化遺産です。

◆一石橋のたもとに残る「一石橋
迷子しらせ石標」

は、安政4年(1857)2月に日本橋西河岸町の町人たちが資金を出しあって建立したもの。



この石標は、江戸の町中で迷子になった子どもの情報を知らせるために使用した。石の正面に「まよひ子のしるべ」とあり、左側に刻まれた「たづねる方」の部分には迷子の特徴を記した紙を貼り、右側に「しらする方」には迷子の所在に関する情報を書き記した紙を貼りました。左側「たづねる方」紙を貼る窪みが見える 右側「しらする方」

◆東京都教育委員会、平成8年3月8日建設の説明板には次の記載がある。

一石橋は「いっこくばし」とルビ。

東京都指定有形文化財(歴史資料)。指定:昭和17年9月旧跡。昭和58年5月6日種別変更。

江戸時代も後半に入るころ、この辺りから日本橋にかけては盛り場で迷子も多かったらしい。もし迷子が出た場合、町内が責任をもって保護することになっていたので、付近の有力者が世話人となり、安政4年(1857)にこれを建立したものである。

柱の正面には「満(ま)よい子の志(し)るべ」、右側には「志(し)らする方」、左側には「たづぬる方」と彫り、上部に窪みがある。使用法は左側の窪みに迷子や尋ね人の特徴を書いた紙を貼り、それを見る通行人の中で知っている場合は、その人の特徴を書いた紙を窪みに貼って迷子、尋ね人を知らせたという。いわば庶民の告知板として珍しい。このほか浅草寺境内と、湯島天神境内にもあったが、浅草寺のものは戦災で破壊された。

◆鹿島満兵衛著、大正 11 年(1922)『江戸の夕栄(ゆうばえ)』(中公文庫)には次の記述がある。

迷子探し 夏期は割合に少なきも、冬分木枯し吹きすさむ頃になると、弓張提灯をつけ夜中四五人の一連(ひとむれ)、鉦を太鼓を打つかなしげな声で、「迷子の迷子の何某やあーい」と呼びあるく。これは子供のみにあらず、老人もあり、妻女もありて、いかにもかなしげな陰声なり。両国橋、一石橋等には迷ひ子のしるべといふ石碑あり。尋るかた教ゆるかたの二方面あり、警察はなし新聞紙なき時代には、自力をもって尋るのほかかなりしなり。

迷子石標の下部に彫られた几号水準点

◆**几号水準点** 石標の正面下部に「不」の形をした水準点の彫り込みがある。これは「几(き)号水準点」とよばれ、明治 9 年(1876)ごろに内務省が実施したイギリス式の測量点で、記号が机に類似しているところから「机=几」とされ、また不号水準点ともいわれたという。当時東京市内に多く設置されたが現存しているのは珍しい。その後は測量方式が変更されたりして、使われなくなった。



このときの水準点は独立した標石のほか、恒久的な建築物もしくは石組み等のものに、「不」の字に似たこの標識を刻み、その横棒部分に測量器具をあてて標高を計測した。英語では「Bench Mark」という。基準点は靈巖島水位標をゼロメートルとした。